



Title	曲にふさわしい歌唱表現とその創意工夫に関する研究
Author(s)	加納, 暁子; 力田, 和歌子
Citation	長崎大学教育学部教育実践研究紀要, 18, pp.29-37; 2019
Issue Date	2019-03-20
URL	http://hdl.handle.net/10069/39074
Right	

This document is downloaded at: 2019-06-15T21:26:40Z

曲にふさわしい歌唱表現とその創意工夫に関する研究

加納暁子（教育学研究科）、力田和歌子（附属中学校）

1. はじめに

音楽科において、基礎的な技能の習得は不可欠であるが、この技能は音楽を表現する中で活用され、生かされなければ意味がない。音楽科の目標において平成20年度の学習指導要領では「表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、音楽を愛好する心情を育てるとともに、音楽に対する感性を豊かにし、音楽活動の基礎的な能力を伸ばし、音楽文化についての理解を深め、豊かな情操を養う。」と示されていた。この中で「音楽活動の基礎的な能力」とは、生涯にわたって楽しく豊かな音楽活動ができるための基になる能力を意味し、音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じることと結びつくことによって、音楽活動の基礎的な能力として意味をもつとされていた。この「音楽活動の基礎的な能力」は平成29年度告示の学習指導要領では「知識及び技能」の習得に関する目標として、「曲想と音楽の構造や背景などとの関わり及び音楽の多様性について理解するとともに、創意工夫を生かした音楽表現をするために必要な技能を身に付けるようにする」と示された。併せて、「思考力、判断力、表現力等」の育成に関する目標として「音楽表現を創意工夫することや、音楽のよさや美しさを味わって聴くことができるようにする」と2観点に分けて詳しく示された。音楽科における「知識」の習得は「音楽を形づくっている要素などの働きについて実感を伴いながら理解し、表現や鑑賞に生かすこと」と「音楽に関する歴史や文化的意義を表現や鑑賞の活動を通して、自己との関わりの中で理解できるようにすること」とあり、その後の学習や生活においても活用できることが必要である。また「技能」に関しては、「創意工夫の過程で、様々に音楽表現を試しながら思いや意図を明確にしつつ、また技能も習得されていく」ことが必要であり「変化する状況や課題などに応じて主体的に活用できる技能として身に付けることができるようにすることが重要である。」とされている。このことから、音楽を形づくっている要素を、活動をとおして理解し、思いや意図をもって音楽を表現する中で技能が身に付き、その技能を生かしながら創意工夫することによって音楽表現を高めていくことをねらいとした研究課題を設定した。

2. 研究の経緯

平成28年12月から平成29年2月にかけて中学1年生を対象に「君も作曲家の卵！～オブリガートを作ろう～」と題した研究授業を行った。この授業では、2人組で作ったハ長調の二部形式の旋律に和声を付けたり、主要三和音の構成音

を用いてオブリガートを作ることによって、小品を完成させ、その過程において音楽を形作っている要素（リズム、旋律、テクスチュア、構成、形式）や構造、主要三和音について理解を深めた。また、小学校での既習曲からオブリガートの「リズムに関する気づき」「旋律に関する気づき」を導き出し、旋律にふさわしいオブリガートを作った。生徒たちは、まず主要三和音や旋律の構成音からオブリガートとして用いるのに適した音を選び、リズムや旋律に関する「気づき」をもとにオブリガートを作った。そして、8分休符による裏打ちのリズムを用いたオブリガートを作った生徒は、クラスメートから「推進力がある」という意見をもらい、「わくわくした感じ」というイメージを感じ取った。この授業から生徒は読譜力や記譜力を養う過程で、音楽を形作っている要素や構造を理解し、その働きが生み出す雰囲気についても感受することができた。以上のような前年度の研究を経て、今年度は、自己のイメージと音楽を形作っている要素を関連させながらオブリガートを作って演奏することを通して、曲にふさわしい歌唱表現を、創意工夫を伴って高めていくことを目標とする。

3. 研究授業の概要

前年度の研究成果を受け、平成 29 年度は「花の街」の歌唱表現において、最後の5小節にオブリガートを付け、曲に込められた思いを一層豊かに表現するために、オブリガートを再構築し、思いや意図を表現するための発声や身体の使い方といった技能を吟味し、質の高い歌唱表現を実現させていくことをねらいとする。また、本研究では「表現」「創作」「鑑賞」の3分野にわたって学習を展開することを特徴とする。

題材名：詩や曲の背景を理解し、込められた思いを生かして歌おう「花の街」

題材の目標

- ・曲想を感じ取り、音楽の構造や曲の背景を理解して、曲にふさわしい歌唱表現を創意工夫することができる。
- ・自己のイメージと音楽を形づくっている要素とを関連させ、曲にふさわしいオブリガートを作って演奏することができる。

教材名：「花の街」（江間章子作詞／團伊玖磨作曲） 対象学年：中学2年生

評価規準

音楽への 関心・意欲・態度	音楽表現の創意工夫	音楽表現の技能	鑑賞の能力
曲想と音楽の構造との関わりや、歌詞の内容と曲の背景に関心を持ち、音楽表現を工夫して歌う学習に	自分たちの作品づくりにおける、音楽を形づくっている要素の取り入れ方や変化のさせ方について、思いや意図	和声を理解して、曲にふさわしいオブリガートをつくることができる。【技-①】	曲想を音楽の構造との関わりから理解し、自分なりに根拠をもつ

主体的に取り組もうとしている。【関－①】 級友と協力して、オブリガートを付ける学習に主体的に取り組もうとしている。【関－②】	を持っている。【創－①】 旋律、強弱を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ、歌詞の内容や曲想を味わいながら、思いや意図をもって音楽表現を工夫している。【創－②】	曲にふさわしい音楽表現をするために必要な発声、呼吸法等の技能を生かして歌っている。【技－②】	て演奏を評価することができる。【鑑】
---	---	--	--------------------

学習活動と評価の計画

学習活動	教師の関わり	評価の観点				時間
		関	創	技	鑑	
3人の演奏家による演奏を聴き、曲のよさや美しさを味わい、自分なりに演奏を評価する。	自分が調べてきたことを6人班で伝え合いながら、曲の背景や歌詞の内容を理解させる。また、音楽を形づくっている要素（速さ、声色）に着目させながら、比較聴取をさせ、互いの意見を交換させる。				○	1
「花の街」を歌唱し、フレーズや曲の構成、和声を理解する。	移動ド唱法により、旋律の動き、フレーズの方角性、転調和音が用いられていることを理解させる。	①				1
ペアで曲の最後4小節にふさわしいオブリガートをつくる。	既習事項であるオブリガート創作の約束を生かして、五線譜に記譜させる。級友と対話を重ね、より曲にふさわしいものになるよう助言する。	②	①	①		2
中間発表会を行う。	3ペアが一つの班となり、それぞれの演奏を聴き合うことで、曲に最もふさわしいと感じるオブリガートの一つを選ばせる。	②	②		○	1
オブリガートをつけて、曲にふさわしい歌唱表現を追究する。	曲に込められた思いを一層豊かに表現するためのオブリガートになっているかについて、オブリガートの旋律と表現技能の両面から再考させる。		②	②		1
発表会を行い、互いの完成作品を聴き合う。	曲に込められた思いが一層豊かに表現されたものであるか、音楽を形づくっている要素を視点に、互いの演奏を相互評価させる。			②	○	1

4. 授業分析

第1時

本時の目標は「曲に込められた思いを探ろう」であり、「花の街」の歌詞を朗読

し、歌詞から感じ取ったイメージをまず色鉛筆で塗る。その後、夏休みの宿題として各自で作詞者と作曲者について調べたレポートを持ち寄り、2人組で曲に込められた思いについて話し合った。「輪になって、輪になって・・・の箇所から戦争でばらばらになった人たちの心をつないでいる」「1, 2番は明るく、日本を元気づける感じだが、3番のひとり寂しくは、戦争は悲しいものだと語りかける」「七色の谷、美しい海、花の街など平和への願いが表されている」といった意見が出され、クラスの思いとして「戦後の日本の復興と平和への祈り、憧れを描いたもの」ではないかという意見にまとまった。

その後、鑑賞の活動に移る。3人のソプラノ歌手（秋山恵美子、黒澤明子、鮫島由美子）が歌う「花の街」の比較聴取を行う。秋山氏はイ長調で明るい感じ、ヴィブラートを多用した華やかでオペラのような声質である。黒澤氏はヘ長調でテンポは速め、ヴィブラートは少なく素朴である。鮫島氏は嬰ヘ長調で、秋山氏と黒澤氏の間のような、優しい控え目な表現である。全体的に丁寧に歌われており、3番の最後は少しテンポが遅くなる。3者の演奏を速さ、音色、強弱の観点から聴き分け、自分が曲に込められた思いが最も伝わると感じる演奏とその理由についてワークシートに記入した。

第2時

前時の3人のソプラノ歌手による「花の街」を再度鑑賞し、自分が一番好きな演奏を選ぶ。ワークシートへの記述は宿題としたが、秋山氏の演奏は「全体的に声が明るい感じで上を向いて前向きな感じだから」、黒澤氏の演奏は「明るくも暗くもなく、透き通った声と軽やかなテンポに少し寂しさや切なさを感じつつ、楽しかった思い出を話しているように感じられるから」、鮫島氏の演奏は「にこにこしながら歌うのではなく、悲しみの中で歌っているのが分かる曲だった。中でも3番で悲しみをはっきり歌っているから」という理由をそれぞれ記述していた。

その後、歌唱活動を行う。本時の目標は「花の街を味わって歌おう」とし、曲に込められた思い「戦後の日本の復興と平和を願う」を思い浮かべながら歌唱する。強弱を意識して歌う他に、移動ド唱を行った。更に、この曲で1番大切なフレーズはどこであるかを考える。一見、「輪になって～駆けて行ったよ」という中間部の上行フレーズという考え方もあるが、本時では終わり5小節の「春よ～駆けて行ったよ」という下降フレーズを大切にしたいフレーズとした。そして、この最終フレーズに今後、オブリガートを付けていくことを予告し、1年生の既習事項である主要三和音の進行や主旋律、オブリガートの特徴を確認し、和声付けを行った。

第3時

まず、團伊玖磨氏の合唱曲「筑後川」より「河口」を鑑賞した後、「花の街」を歌唱する。その後、本時の目標である「オブリガートをつくろう」を提示する。

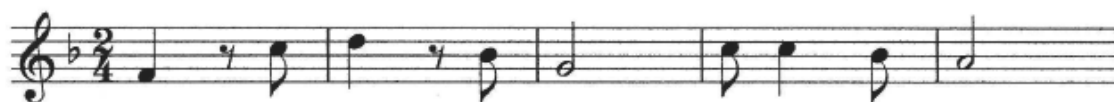
まず、昨年の既習事項である「リズムの気付き」について以下のとおり確認する。

- ・主旋律の音がのびている所か、休符の所にオブリガートがリズムを打っている。
- ・主旋律がせわしく動いているときに、オブリガートはゆっくり動いている。
- ・主旋律とオブリガートが重なっている部分は和音になっている。

確認後、まずはオブリガートのリズム部分のみ作る。リズムが出来上がった後、音を付けていく活動に移る。その際、以下に挙げる昨年の既習事項である「旋律の気付き」について確認する。

- ・主旋律の音が上がるとき、オブリガートの音は下がる。
- ・主旋律の音の下がるとき、オブリガートの音は上がる。
- ・主旋律の音が高いときはオブリガートが低い。
- ・オブリガートの音の低いときは、主旋律が高い。
- ・主旋律、オブリガートともに旋律に和音の構成音が含まれている。
- ・主旋律とオブリガートの音程の差3度。

その後、最後の5小節の和声進行がⅠ→Ⅱ→Ⅱ→Ⅴ→Ⅰ（Ⅰ：ファラド、Ⅱ：ソトシレ、Ⅴ：ドミソ）であることを確認し、オブリガートの音付けを行う。10分ほどでHさんは以下のようなオブリガートを作った。



オブリガートを聴いた他の学生からは、逆行を上手く使っている、最後は3度でハモっているといった意見が出された。

第4時

オブリガートを作曲する2時間目にあたる。まず、曲に込められた思いは「戦後の日本の復興と平和」であり、第3フレーズが一番大切であることを確認する。そして、数人の生徒のオブリガートが紹介された。例えば、Tさんは「大丈夫だよ、希望がある」という思いを込めて以下のようなオブリガートを作曲した。背中を押されているような作品である。



各自のオブリガートは出来上がっている状態であり、本時の目標は「オブリガートを歌い合おう」である。手順としては、まず①楽譜を清書する、②ペアで互いのオブリガートを歌い合う、③別のペアに聴いてもらい、どちらのオブリガートが、よりじっくりくるか（より曲を引き立たせるか）選んでもらうという3段階を採る。自ら作曲したオブリガートを歌うことは思いの外難しく、主旋律と合わせて歌うとかなり音程がつかれてしまうようであった。また、誰のオブリガートが一番良いか決める場面では、なかなか自分たちの判断で決めることは難しそ

うであった。

第5時

本時は中間発表を行い、2人一組のペアでどちらかのオブリガートを選び、更に3つのペア（6人）が集まって、より曲を引き立たせるオブリガートを選ぶ活動を行う。選ぶ視点として、①歌いやすいこと、②自然な流れがあること、③曲に込められた思い（戦後の日本の復興と平和）に合っているかという3つの条件が生徒から提案された。あるグループは以下のオブリガートに絞った。戦後の復興ということで、明るい気持ちを表すために8分音符を使用している。



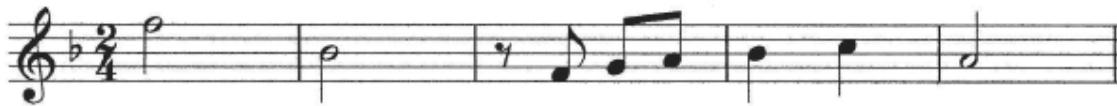
第3時、第4時は創作活動が中心であったが、本時より再び歌唱活動に焦点をあてる。主旋律と創作したオブリガートを合わせて歌うのだが、オブリガートが難しすぎたり、互いにつられてしまい難しい状況である。そこで、本時ではないが、歌唱の技能を確かなものにするために、ハンガリーのハンドサインを用いた指導を行った。各音の性格に合ったハンドサインが決められており、移動ド唱法に対応できるため、どの調にも適応できて、その音の性格に合った歌唱法を実践できる。生徒は積極的にハンドサインを取り入れた歌唱に取り組んでおり、サインで音のイメージを明確にすることによって、より安定した発声や正確な音程で歌唱することが出来、目に見えて歌唱の能力が高まっていた。

第6時

前時において、グループの中で代表のオブリガートを選出したが、まだ主旋律とオブリガートがきれいに合唱できない。そこで、本時の目標は教師が提示するのではなく、生徒から自分たちの意見を出させ、「曲に合った歌い方を工夫しよう～オブリガートを生かして～」となった。そして、この目標を達成するために、どのようなことに注意すればよいか考え、「歌唱表現」（強弱、語感、速さ、主旋律とオブリガートのバランス）、「オブリガート」（オブリガートを再考するとともに、オブリガートも歌詞に合うように歌う）、「技能」（歌唱の技能）の3項目に留意しながら活動を行うこととなった。M君は以下のようなオブリガートを作曲した。イメージは寄り添うような優しい感じのオブリガート、背中を押して顔を上げていくような感じである。



このオブリガートは上行から下行して主旋律と逆行する形になっている。そこで、上行形はクレッシェンドし、下行形はディクレッシェンドを付けて歌うことにより、音の流れがよりきれいに表現でき、背中を押してというイメージも表現できるとした。また、Eさんは以下のようなオブリガートを作曲した。



Eさんは、「空から光が差し込んでくる感じで、最後ハモったところは、きれいな和音にして、希望を表しました」と作曲意図を述べた。このグループは歌唱技能が高く、主旋律とオブリガートが美しく調和していた。その中で、冒頭のF（ファ）音はとても高く、第一声がこの音であると非常に歌いづらい。そこでクラスでどのようにすれば、光が表せるか歌唱の技能について話しあった。歌う前にブレスを沢山吸う、腰の支えが必要である等、生徒はこれまでに習得した技能を挙げ、より美しい高音が出るように探究していた。

M君は授業の最後に、自分が学んだこととして以下のような感想を述べた。

1年生のときもオブリガートを付けたけれど、(今年は)ちゃんと作曲家のことを調べて、「こういう思いを込めていたんだ、じゃあこうしよう」と作っていった。作る上で、作曲者の思いを大切にし、それに自分の気持ちを上乘せして、プラス技能も付け加える。よりよいオブリガートを作るためにいろいろ学んだ。自分が表現したいことを表現する、言葉だとできるけれど、実際歌うと難しい。自分の班はオブリガートだけだときれいにできるが、主旋律と合わせると外れたりして難しかった。

第7時

「花の街」の学習の最終時であり、発表会の後、今回の学びを振り返り、自分なりに「身に付いたり、伸びたりした力」を分析し、「花の街」を学習して、心が動いたことについてレポートにまとめた。

Tさんは音楽を形作っている要素とイメージについて以下のように記述している。

T：今回の学習で1番身に付いた力は「思い」を「音」で表す力だと思う。作曲者の團伊玖磨さんが復興への願いや平和への祈りを、特に最後のフレーズに託し、その前のフレーズを敢えて強くして盛り上がらせたり、短調の和音を使ったりして、最後のフレーズを目立たせようとしていたことが、一番驚いた気付きだった。またオブリガートを付けるときには、希望を表すために最後の音を上げたり、楽しい平和な世界を表すために、リズムを細かく刻んだり、イメージしているものを、音楽を形作っている要素を使って表すことが難しかった。

IさんとMさんは、歌唱表現の技能と創意工夫について以下のように記述している。

I：今回の学習は、まず歌詞の意味を熟考するところからはじめた。一つ一つの言葉、助詞まで見つめて、曲の真意を見つけられたことは大きな収穫だと思う。他にも、声の出し方だけでなく、音価、強弱、発音（母音、子音）などすべての要素を考えられた。特にオブリガートを付けたフレーズは、思いも強くて山があったので、語感を大切にイメージ通り伸びやかに歌うことを心掛けた。

M：強弱記号や音程だけを意識してただ歌うのではなく、曲に込められた思いからどのように歌えばそれがより伝わるかを考えて、そのために技能を使って表現するということがすごく実感することができた。どんな曲にも、そこには背景や思い、作詞者からのメッセージが込められているので、私たちはそれを感じ取り表現していくことが大切なことなのだと思う。これからも「ただ歌う」のではなく、歌を通して「何を伝えたいのか」を考えて、思いがより伝わり人々の心に届くように、今まで習った技能を使いながら、表現していきたい。

K君は自らの生活や感情と関わらせながら学習を振り返っている。

K：「花の街」が作られたとき、日本は戦争に負け、敗戦国として「日本はもう復興できないだろう」と他国から言われていました。そのような中でも、希望を捨てずに「どんな国でありたいか」を考え続け、それを歌に表した。世間からの風当たりが強くなるかもしれないという不安もあったかもしれない。それでもこの曲を作った方々を僕は尊敬しています。今、こうして自由に過ごせて学べること、夢をいくらでも見て叶える環境がそこにあること、日常に感謝すべきだなと思いました。そして、僕は最近「夢を見るなんて無駄だ、どうせ叶うことはない」と思うことが度々ありました。しかし、「七色の谷、風のリボン、美しい海、花の街」このような歌詞が戦争後の歌に入っているのだったら、夢を見てもいいのだと改めて気付かされました。

おわりに

1年生のときは自作の単旋律にオブリガートを付け、和声進行や主旋律とオブリガートの関係を学習した。今年度の「花の街」では比較聴取を行った鑑賞活動をもとに、創作活動でオブリガートを付けることによりイメージが豊かになり、そのイメージを再び歌唱活動に反映させることにより、技能や歌唱表現の質を高

めることができた。本来であれば「花の街」は1～2時間で済ませてしまう教材で、その良さを短期間で味わい歌唱表現に結び付けていくことは難しい。しかし、1年次で創作したオブリガートと比較すると使用音域が広く、「大丈夫だよ。希望がある」「空から光が差し込んでくる感じ」などイメージも豊かになり、そのイメージにあったオブリガートは、旋律の動きや流れがとてもダイナミックになっている。そして、豊かなイメージを再び歌唱活動においてどのように表現すれば良いかという技能も生徒自らが考えることにより、思いや意図が伝わる歌唱表現が実現できたのではないかといえる。ただ、楽譜の強弱記号を再現するだけでなく、曲想、音楽の構造、歌詞の内容、曲の背景を一体的に理解し、表したい思いをどのように表現していくかについて創意工夫や試行錯誤を重ねる過程で、技能の高まり、思いの深まりへつなげていくことが重要である。

参考文献

- 文部科学省（2018）中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 音楽編
文部科学省（2008）中学校学習指導要領解説 音楽編（平成20年）
加納暁子、力田和歌子、三上次郎（2018）「創作活動を通じた和声とテクスチャの学習」長崎大学教育学部教育実践研究紀要第17号、pp.49～57

